

I 今年度の取組と自己評価

1 教育活動への取組と自己評価

(1) 学習活動

今年度の取組目標	自己評価
<p>①進学指導重点校として、すべての生徒に大学進学に向けての基礎学力定着を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校入試の分析を行うことで、過去の入学生との差異を調査した。その分析を入学後の教科指導に反映させる体制づくりが課題である。</li> <li>・1, 2年次に習熟度別授業、少人数授業を実施し、3年次には文理両面にわたる多様な選択講座を開講することで、生徒の学力、進路希望に応じたきめ細かい指導を行った。</li> <li>・年4回の定期考査ごとに成績を出すことで生徒に学習到達度を振り返らせることができた。必要に応じ、補習や個別指導を実施した。</li> </ul>
<p>②生徒の学習意欲を向上させるため、授業内容・方法を工夫する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年間を見通して、生徒にどの程度の学力をどの時期に身に付けさせるか、という視点をもった独自教材を授業に用いることで、生徒の学習意欲向上、難関国立大学合格に必要な学力、そして高校卒業後にも通じる高い教養を身に付けさせることができた。今後、そのような独自教材を作成できる人材を増やしていくことが必要である。</li> <li>・2年次の総合的な探究の時間において、課題発見・解決型の活動を通じ、将来の研究活動にも繋がる探究活動が実施できた。学校全体での探究活動に向けた組織づくりが必要である。</li> <li>・新型コロナ感染拡大による制約があったが、オンラインによる配信等で生徒の学習活動や、学習に向けての意欲を支援する対応ができた。</li> <li>・各教科・科目から出される課題の量や学習のタイミングに関しては教科間の情報交換が必要であった。</li> <li>・生徒間の対話や学び合いを重視した授業を、多くの教科で展開した。</li> <li>・オンライン英会話を2年次で実施し、生徒が英語に親しむ機会を設けた。</li> <li>・学校図書館の授業での活用や、蔵書の充実により生徒の読書活動が活性化した。授業との連携等を充実させ、低学年からの図書館利用の拡大を進めていく。</li> </ul>
<p>③生徒の学習時間を確保し、進学実績の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月と11月の2回進路意識調査を行い、進路希望や学習時間、スマートフォンの利用時間等、生徒の実態を把握した。その結果をキャリアガイダンス等で生徒にフィードバックし問題意識を持たせた。</li> <li>・授業に加え、補習・補講の実施や小テスト、課題テストの実施等により年間を通じての学力向上を図った。学校行事等の実施時期を考慮し、有効かつ合理的な授業計画を立てることで年間授業時数を最大限確保できた。</li> <li>・行事期間の下校時間については、委員会生徒の呼びかけもあつて比較的順守できていたが、日常的には、下校時間を過ぎてても教室の灯りがついていたり、忘れ物を取りに教室に戻っていく生徒の姿が見られたりする状況も散見され、教員によるけじめをつけた時間管理の指導</li> </ul>

	<p>が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日常の活動制限もあり、考査前に部活動を行うことが多かった。メリハリのある活動計画を立てて実施することが必要である。</li> <li>・自主学习支援事業を活用して自習室の利用延長と休日の開放を行った。</li> </ul>
④組織として教員の授業力向上に努め、教科指導の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度当初に教科内で目標を設定し、年度末に振り返る仕組みを構築した。</li> <li>・年間指導計画のホームページ公開を実施した。</li> <li>・毎月教科会を定例で実施し、計画的な指導の実施に取り組むことができた。一方で、模試等を活用した学力分析が実施できている教科とできていない教科があり、どの教科でも生徒の学力分析ができる体制づくりが必要である。</li> <li>・一部の教科で定期考査の統一が進んでいない。新学習指導要領の実施に伴い、観点別評価方法等の細目についての共有や評価の在り方の共通理解が求められ、統一を進めていく必要がある。</li> <li>・指名制の授業研究への参加はなかったが、若手教員育成道場に参加している6名の教員の授業力向上、アドバイザーや主幹教諭・指導教諭からの指導により、組織としての授業力底上げに取り組むことができた。</li> <li>・生徒による授業評価の活用は定着している。</li> </ul>
⑤東京都の教育施策を見据えて、新たな教育課題に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語教育推進校（第二期）を終え、生徒の英語4技能向上を検証した。受験英語にとどまらない英語を使える力を育てる指導が求められる。</li> <li>・理数研究校としての活動は、「科学の甲子園」等にも積極的に参加し、成果を出す等、初年度としての目標は達成できた。次年度以降もこの状況を充実させていく必要があるが、取り組みに向けた時間の確保と学校としての組織づくりが今後の課題である。</li> </ul>
⑥デジタル技術を活用した教育を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットワークが脆弱であり、オンラインによる授業配信等でも十分な通信内容を確保できないことがあった。また、学校説明会や個別相談会でも、通信環境が不十分な状況があり、解決が必要である。昨年度までオンライン授業等の対応が出遅れていたが、今年度は短期間ではあったが、オンライン授業等を実施できたため、年間指導計画が十分に実施できた。</li> <li>・生徒へのアンケート、学校からの情報発信等において、紙媒体からデジタルコンテンツの利用に向けた移行を実施できた。今後もこの流れを充実させていく。</li> </ul>

## (2) 進路指導

今年度の取組目標	自己評価
①1学年より3年間を見通した系統的、組織的な進路指導をきめ細かに行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年間を見通した進路指導計画に基づいて指導を行ったが、LHRの有効活用が今後の課題である。</li> <li>・1年生3回、2年生3回、3年生5回キャリアガイダンスを行った。</li> <li>・自己の将来考えさせるために1, 2年生を対象に進路講演会を、1年生を対象に様々な職業に従事する卒業生による「進路懇談会」、2年生対象に大学生の卒業生による「進路懇談会」を実施し、進路意識を高めた。また、大学の内容を理解するために「東工大模擬授業」「一橋大模擬授業」「女子高生のための東大説明会」「東大ガイダンス」「医学部</li> </ul>

	<p>ガイダンス」「医学部受験説明会」を実施した。「京都大学見学ツアー」は実施できなかったが「東大見学会」を2年ぶりに実施できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進路指導を理解してもらうために各学年保護者を対象に「進路講演会」を実施した。</li> <li>・個人面談はおおむね年3回実施し、生徒の学習状況の把握、進路希望等、一人ひとりに寄り添った指導を充実させた。希望制による三者（保護者）面談は希望が少なかった。今後希望しやすい仕組みを検討していく。</li> <li>・各学年で生徒・保護者向けにキャリアガイダンス、進路懇談会等を実施した。感染予防のために必要に応じてオンライン配信も導入した。</li> <li>・進路通信を発行し進路情報の提供に努めた。</li> <li>・進路情報専門員の導入により、資料の整備が進んだ。</li> <li>・「卒業生を励ます会」を2年ぶりに実施することができた。</li> </ul>
②学力向上のため、長期休業日中の講習の参加生徒の増加を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季講習を9期にわたり実施した。一昨年と同程度の内容、人数で実施できた。</li> <li>・社会状況に応じて、講習の開放は実施しなかった。</li> <li>・休業中の講習優先の意識は定着している。</li> <li>・4月には夏季講習計画を立案し、生徒に可能な限り早く提示している。</li> <li>・秋季講習、直前指導等も一昨年並みの指導ができた。</li> </ul>
③進学指導重点校として培ってきた学習指導・進路指導ノウハウをさらに発展させるとともに、進路データの蓄積を行い、教員の共通理解を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「進路の手引き」「学習の手引き」を作成し、進路意識の動機付けと学習意欲の向上に活用した。</li> <li>・年間の計画に従って各学年で模擬試験を実施した。</li> <li>・模試分析会を実施し、参加者数も徐々に増加し、分析結果を教科指導に反映する取り組みが出来つつある。</li> <li>・「出願指導研究会」を3回実施し、生徒の状況を把握し進路情報の共有に努めたが、きめ細かい進路指導や出願指導ができるように一層研修する必要がある。</li> </ul>

### (3) 生活指導

今年度の取組目標	自己評価
①基本的な生活習慣の確立に向けた指導を重点的に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集会や日常の言葉がけにより自己規律を重視した指導を行った。個々の意識の差が大きいことが課題である。</li> <li>・下校時間については、感染症拡大防止対策の影響に応じて1年間を通して変更されることがあった。その都度部長会等を通して連絡をしていたが、十分に定着されていないような場面も実際には見受けられた。時間を守ろうとお互い言葉をかけあっている生徒たちもいたが、下校時間が過ぎているにもかかわらず、その意識が十分でない生徒も見受けられた。また、下校マナーについて、地域の方々から厳しい御意見を頂くこともあった。公共の場でのマナーを守れていない生徒も少なからずいるのではないかとという前提で指導を検討する必要がある。</li> <li>・生徒の意識の変容に伴い、指導計画の見直しや改善を毎年行う必要がある。</li> </ul>
②生徒が安心して学校生活に取り組めるよう、質の高い教育環境を整える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ対策委員会、生徒支援委員会等を通じていじめと認定するような案件はなく、生徒同士が良好な関係を築いていることを様々な場面で確認できた。また、ふれあい月間を通じて、いじめに関するアン</li> </ul>

	<p>ケートを実施し、具体的な回答に応じては個別対応を行った。いじめにつながるような事例報告はなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不審者の侵入が実際にあり、教職員の危機管理意識の改善が必要である。</li> </ul>
③関係諸機関との連携や交流を通して、生徒の安全を守り、公共心を育てる取組みを実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通安全教室では、自転車マナー等の意識改善を促す内容であり、生徒たちも真面目に取り組んでいた。・セーフティ教室を実施しSNSやインターネット利用上の指導をおこなった。</li> <li>・生徒会が作成した「ねぶた金魚」の模型を国立駅に展示させていただき、駅利用者や地域からも好評を得た。また文化祭演劇に向けた感染対策について、高校生新聞社賞を受賞した。生徒会活動については先を見通した計画的な実施を指導することが課題である。</li> <li>・校外での活動が制限され、ボランティアは十分にできなかったが、東京都の換気啓発動画に出演するなど、できる範囲での活動により意識を高めた。</li> </ul>

(4) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	自己評価
①学校行事を通じて、国立高校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実・発展させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同学年の横のつながりと上級生・下級生との縦のつながりを持たせながら、主体性を身につけさせ学校行事等の企画・運営に当たらせた。感染拡大による行事の内容変更等が相次ぎ、要項や予算計画が教員に周知できないことがあったため、次年度は十分な計画が必要である。この2年間で、新型コロナウイルス感染拡大で、行事の「これまで」の経験が途切れており、新たな在り方を作っていくことも必要である。</li> <li>・第九演奏会は2年連続で中止になってしまったものの、次年度へ向けた準備など進められている。</li> <li>・クラス演劇については、生徒主体で進めることができた。国高祭実行委員会及び文化祭実行委員会生徒との頻繁な打ち合わせや進捗状況の確認を通して、連携を密におこなった。直前の急な変更の際は、確定した内容の教員への周知が後手に回ることがあった。</li> <li>・体育祭実行委員会の生徒たちとコミュニケーションを密に図りながら、1年間をかけて準備や計画を行ってきた。感染症対策と熱中症対策の両方に留意しながら行うという計画を実施できたことは評価できるが、早い段階で形態の変更等を提案するべきであった。</li> <li>・新入生歓迎会及び文化祭において、感染症対策や事故防止対策を生徒とも十分に協議、指導して、当日の見回り等も実施し、事故ゼロを実現した。特に文化祭では人数制限や換気を徹底し、感染発生やクラスターを防ぐことができた。クラスマッチでも、開催には至らなかったが、生徒たちが事前に多くの話し合いを重ね、コロナウイルスの影響を多大に受けながらもその状況下で実施できる最善の策を考えていた。</li> </ul>
②部活動を通じて、ルールを順守する態度を身に付けさせると共に、目標に向かって協力し、努力する態度を育成させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生オリエンテーションでは、制限がある中でも各部生徒が創意工夫を凝らしながら自らが所属する部活動の魅力を最大限にアピールでき、今年度の加入率は131%であった。</li> <li>・部長会を通じて部活動に関する連絡事項を伝達したが、連絡が行き届かないことがある部があった。部長としてのマネジメント力の不足や、</li> </ul>

	<p>部員と顧問とのコミュニケーション不足等が原因として考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動ガイドラインに則った活動という前提にたつて活動計画をたてる意識づくりが各顧問の側に求められている。感染拡大防止対策として、部の活動に様々な制限がかかるということを認識しきれていない状態で、活動計画を立ててしまっている部があった。</li> <li>・活動しない日の設定はおおむね守られている。</li> <li>・いじめや体罰については、適宜指導を行い、安心できる活動を行っている。</li> <li>・活動の積極的な発信を行っている部とそうでない部の差が大きく、今後の課題である。</li> </ul>
--	--

(5) 安心安全と健康づくり

今年度の取組目標	自己評価
①快適な学習環境維持のために、校内美化に努める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内美化に関しては、生徒の意識改革も必要であり、「きれいな学校を自分たちで維持する」という方向にもっていく必要がある。</li> <li>・ごみの分別、持ち帰りは徹底されている。行事等で出た資材の再利用も十分に達成されている。一方で、学校行事等が終わった後も、教室等に使用したり作成したりしたものが放置されたままであることがあり、行事等の意識の切り替えができない環境が見られるため、改善が必要である。</li> </ul>
②生徒の心身の健康に配慮した教育活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月から6月にかけて、定期健康診断および諸検査を行い、生徒の健康状況の把握に努めた。</li> <li>・生徒の健康への意識は、感染症対策もあり、高まっている。6月に、スポーツトレーナーによる暑熱対策講習会を生徒向けに実施し、夏場の事故対策を行った。</li> <li>・保健体育や家庭科の授業等を通じ、食育や体力の向上について指導している。</li> <li>・避難訓練を定期的実施した。生徒の訓練への意識は高く、真剣に取り組み、災害を想定した避難所開設訓練により他者や地域の安全を支える意識を持たせた。</li> <li>・スクールカウンセラーとの連携はうまく行われている。今年度も生徒・保護者からの相談や教員との連携により、生徒支援に役立った。また、生徒理解研修の講師として、生徒指導に有意義な講演を実施した。</li> <li>・生徒支援委員会を通じて、個々の生徒の多様な状況に、対応してきた。引き続き教員間の情報共有や、複数で対応する教員の役割分担をチームとして意識することも必要である。</li> <li>・生命尊重について、折に触れ指導するとともに、教員に対しても、常に注意喚起を行っている。</li> <li>・関係者が新型コロナウイルス感染に罹患した際には、校内の接触状況、消毒状況の把握を迅速に行い、クラスターの発生やそれに伴う休校措置は一件も起こらなかった。また、感染に関する情報も速やかに発信することで、感染予防の意識づくりを行うこともできた。</li> </ul>

(6) 募集・広報活動

今年度の取組目標	自己評価
----------	------

<p>①スクールガイド及び学校紹介ビデオを早期に作成し、広報活動の充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍でも行事写真、説明資料などをできるだけ魅力的な新しいものと入れ換え、新課程も含めた最新情報を中学生及びその保護者へ伝わるようにした。</li> <li>・直接来校できない中学生向けにHPを通じて動画配信等を充実させ、制限下で来校できなかった中学生やその保護者向けにも広報に関する情報が行き渡るように取り組むことができた。</li> </ul>
<p>②学校説明会や授業公開、ホームページを活用し、全教員が必ず募集広報活動に参画することで、本校のよさを強くアピールする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人的な面で、更新が一時ストップし、円滑な発信ができない時期があった。</li> <li>・生徒を前面に出すなど、学校の良さをアピールできるようにした。</li> <li>・規模縮小、衛生面配慮など感染症対策を行い、学校見学会3回、授業公開1回、学校見学会11回、小学生対象説明会・入試結果報告会・自校作成問題説明会を実施した。また、説明会・入試関係説明会は後日の動画配信も実施し。来校できない中学生やその保護者に対応した。</li> <li>・教育委員会主催の合同説明会においても対面・Z o o m実施等、利用できるすべてのチャンネルを使って個別相談対応をした。</li> </ul>
<p>③進学重点校に相応しい入学選抜方法を検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領が目指す施策に合致させるとともに、本校が求める生徒像に沿って、きめ細かな協議を行い、推薦選抜における小論文問題を決定した。</li> <li>・本校の求める生徒に適した資質・能力を想定し、綿密な検討により、学力検査における自己作成問題を作成した。中学校における基礎学力の定着状況を測れる作問を心がけ、適切な学力把握ができる出題を実現した。</li> <li>・組織的な選抜業務への対応、丁寧な繰り返しの点検により、誤りのない適切な入学者選抜を実施したが、感染症対策への対応のため、組織全体での業務効率の見直しが必要である。</li> </ul>
<p>④地域の小・中学校との連携による相互の教育課題の共有と解決、地域住民との交流を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍のため、地域の小中学校や自治会等と連携して合同で行う行事はできなかった。そうした中で、生徒単位で中学生への学習支援や地域清掃等に参加した生徒もいた。</li> <li>・公開講座や行事の公開もできなかったが、施設開放は一部実施できた。</li> </ul>

(7) 学校運営・組織体制

今年度の取組目標	自己評価
<p>①校内組織を活性化し、より良い学校づくりを目指した取組を行うための協働体制を確立する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営連絡協議会は感染拡大により3回実施予定であった協議会のうち、2回を書面開催とした。学校からの資料を提供することで、学校の現状を委員の方々と共有することができた。</li> <li>・学校課題の提示はしているが全体での検討には至っていない。</li> <li>・企画調整会議で周知した内容は学校運営の核として運営されている。分掌会議、学年会の議事録の共有化が進み、学校全体の業務進捗状況が把握しやすいようになった。会議の一部では情報共有が不十分な場面もあったため、情報伝達をより適切に行う必要がある。</li> <li>・カリキュラムマネジメント委員会により、スクールポリシーや観点別学習状況の評価について整理した。</li> </ul>
<p>②ICTの活用や会議の効率的運用により校務を効率よく遂行することで、教職員のライフ・ワーク・</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次休暇取得に偏りがあり、年間15日以上取得が難しい職員がいる。一部の教員に過重な負担がかからないように、組織で仕事を進めていけるような体制づくりがさらに必要である。</li> </ul>

<p>バランスの推進を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・週休日・休日の振替は確実に行われているが、一部在校時間の短縮が進まない教員がいる。</li> <li>・紙媒体からオンラインでの配信への切り替え等の効率化は全体として進行中である。</li> <li>・会議の終了時刻を定める等、勤務時間を超えた業務が発生しないよう配慮を行っている。一部、複数の会議が重なり、勤務時間を超えて会議が延長される状況もあり、次年度の課題である。</li> </ul>
<p>③教職員の資質・能力を向上させ、進学指導重点校としての教育活動の在り方を推し進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若手教員にはOJTシートを作成させることで、授業だけでなく、校務全体の指導力向上を図った。</li> <li>・若手教員育成道場により、3回の研究授業及び研究協議を行った。自分たちで設定した授業改善のテーマに沿った研究授業を行い、中堅教諭がそのアドバイザーとして参加したりすることで授業力向上を図った。複数の教科で頻繁に授業参観が行われている。教科の境界を越えて参観及び意見交換ができる枠組みが全体で共有できるようにする必要がある。</li> <li>・指導教諭の模範授業や公開授業を実施し、学校外や他校種からも多くの教員が参観し、都立学校全体の授業力向上に寄与した。</li> <li>・「体罰根絶」に向けて、事故例の周知及び校内研修での繰り返しの注意喚起を年間通して行うことができた。</li> <li>・学期始めや終わりに、服務事故防止研修を行った。情報セキュリティに関するアンケートや研修を定期的に行うことで、セキュリティ対策が十分に行われていることを確認した。</li> </ul>
<p>④経営企画室の経営参画を推進し、業務を円滑に遂行する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経営企画室ガイドラインに基づいた経営参画を企画室事務処理方針で示し取り組んでいる。</li> <li>・自律予算の執行を計画的に進めたが、コロナの影響で補正額が大きくなるなど影響を受けた。</li> <li>・授業料事務、修学支援金処理を遅滞なく処理した。</li> <li>・教育職員との連携に努め、業務を遂行した。</li> <li>・施設、設備、備品の更新は、緊急度を最大限に考えて対応している。</li> </ul>

(8) 国際理解教育

今年度の取組目標	自己評価
<p>①オリンピック・パラリンピック教育を進めることで、多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間の育成に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピック・パラリンピック年間指導計画をもとに、計画に沿って授業や講演会等の事業を行った。</li> <li>・パラリンピックが実施されたことで、実際のパラリンピック競技にも触れる機会があり、生徒の学習への動機づけとなった。</li> </ul>
<p>②グローバルリーダーを育成する取組を実施する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次世代リーダー育成道場について周知し、希望者の指導を行った。</li> <li>・外部機関の留学を希望する生徒が複数見られるようになった。世界史や地理、英語の授業を通じてグローバルリーダーとして必要な知識と教養、視座を身に付けさせた。</li> </ul>
<p>③国際社会で活躍するのに必要なアイデンティティの育成や日本文化の理解を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校外学習が中止となり、伝統芸能に触れる機会が得られなかった。</li> <li>・異文化交流は実施できなかったが、進路講演会等で、海外を舞台に活躍する本校卒業生たちの話を聴くことで、国際社会で活躍することを具体的に考えるきっかけを与えることができた。</li> </ul>

2 重点目標への取り組みと自己評価

重点目標	具体的な数値目標と結果	評価
1 広報活動を充実させ、募集対策に努める。	①夏季見学会来場者数 896名 (昨年 682名) ②学校説明会来場者数 851名 (昨年 747名) ③入試説明会来場者数 282名 (昨年 252名) ④推薦に基づく入学者選抜の応募倍率 3.73倍 (昨年4.06倍) ⑤学力に基づく入学者選抜の応募倍率 1.68倍 (昨年1.54倍)	△ △ △ ○ ○
2 進学重点校としての進学実績を向上させる。	①東京大学現役合格者数 11名 (昨年 15名) ②難関国公立大学現役合格者数 (東京・東京工業・一橋・京都・国公立医学部医学科) 50名 (昨年 54名) ③東京・京都以外の旧帝大現役合格者数 (北海道・東北・名古屋・大阪・九州) 16名 (昨年 16名) ④国公立大学(四年制)現役合格者数 135名 (昨年 151名) ⑤難関私立大学現役合格者数(早稲田・慶應・上智・東京理科) 308名 (昨年 190名) ⑥センター試験文系6教科7科目・理系5教科7科目受験者 247名 (昨年 254名) ⑦センター試験文系6教科7科目得点上回り指数 1.30 (昨年 1.30) ⑧センター試験理系5教科7科目得点上回り指数 1.27 (昨年 1.25)	○ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
3 学力向上のため、長期休業日中の講習を充実させる。	② 長期休業中の講習講座数 138講座 (昨年112講座) ① 長期休業日の講習受講者数(延べ) 9615人 (昨年 7261人)	△ ○
4 学力向上のため、家庭学習時間を増加させる。	①家庭学習時間 1年(春季) 1.41時間 (昨年1.41時間) 2年(春季) 1.64時間 (昨年1.60時間) 3年(春季) 2.53時間 (昨年3.36時間)	△ △ △
5 授業改善に努め、生徒の授業満足度を向上させる。	①学校評価項目「授業その他、本校の学習や教育のあり方全般に満足しています。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント 87.1% (昨年 86.8%)	△
6 肌理の細かな進路指導を実施し、進路指導満足度を向上させる。	①学校評価項目「本校の進路指導は、進路実現の参考になり役立っていると思いますか。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント 84.7% (昨年 88.3%)	△
7 特別活動・部活動を充実させ、生徒の学校満足度を向上させる。	①学校評価項目「学校生活に充実感を感じていますか。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント 93.3% (昨年 96.4%)	◎

◎ 達成 ○ ほぼ達成 △ 未達成

## Ⅱ 次年度以降の課題と対応策

### (1) 教育活動の質を向上させる

授業への満足度は昨年度並みだが、家庭学習時間は依然として目標である（学年＋1）時間に到達していない。これまでも、課す課題の量や時期の調整等、効果的な方法についての検討や、指導教諭会を活用して授業改善の研修を行うなどの工夫を進めてきたが、学校行事や部活動との両立の面で、十分に時間が確保できていないようである。効率よく学習を進める手立ての工夫、スマートフォンに費やす時間をどう学習に振り向けるかが今後の課題である。各教科の更なる創意工夫と、学校全体の学習への雰囲気作りや集会・HR・面談等を通じた指導、学習時間の確保を含めた時間管理意識についての指導を継続的に行っていく。

ICTの活用も少しずつ進んでいるが、一人1台端末の導入に合わせ、授業内外での一層の活用が求められる。また、次年度から、1年次の1回考査の前に到達度テストの設定を行った。高校での学習に早く慣れ、学習習慣を定着させ、低学年から高い意識と志を維持させることを目的としている。これまでの改革と合わせ、新型コロナウイルス感染症拡大により実施できていなかった成果の検証が必要である。いよいよ新学習指導要領に基づく教育課程が始まるが、一層探究的な内容を取り入れるなどの工夫や、新テスト導入を見据えた定期考査問題の工夫等による記述力の向上、新教育課程そのものの検証についても進めていく。

### (2) 生徒の高い進路希望を実現する

今年度も長期休業中や放課後、大学入学共通テスト後の時期等、講習や添削指導などのきめ細かい指導を行い、高い難関国立大学進学実績を維持できた。また、現役での進路決定率が高くなっていることから、現役での希望進路の実現と、高い進路希望を維持させる進路指導の両立が必要である。生徒の高い志を最後まで維持させること、途中で諦めさせないこと、過年度比較や他校比較等のデータ分析が可能になった模擬試験の活用、模試分析や志望校・出願検討への参加者の拡大、長期休業中の講習における内容や設定の検討を進める。大学入学共通テストの傾向に合わせて、情報処理や読解力を培うとともに、新しい入試への対応として記述やコミュニケーションなど表現力の向上にも取り組んでいく。

進路指導の満足度がやや低下している。進路指導について、生徒本人はもちろん、保護者の意向についても適切に把握し、進めていくことが重要である。そのためにも三者（保護者）面談を活用できるようにしていく。現在は希望制であるが、保護者の方からは、なかなか希望しにくいとの声もある。ハードルを低くし、保護者の意向をしっかりと把握しながら、より高い目標を目指すような指導を行っていく。また、それを可能にする教員の進路指導力の向上にも力を注いでいく。

### (3) 学校生活を充実させ、安心して学校生活を送らせる

スマートフォンに費やす時間が大きくなっており、学習時間だけでなく、生徒の生活に様々影響を与えている。利用時間を見直させ、SNSルールの再確認を通して利用方法や注意すべき事柄等について、全校集会、HRを柱に指導や注意喚起を徹底していく。

学校生活の満足度が低下しているが、行事が影響していると思われる。新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校行事や部活動に大きな制約が生じた。これまで通りとはいかない部分や、これまで繋いできた伝統や手法が途切れてしまう状況もある。しかし、このことをプラスにとらえて、行事の意義や部活動の在り方を検討し、見直すことが重要である。生徒の意識の変化にも留意しつつ、生徒自身にしっかりと考えさせながら次年度の学校行事や部活動を再構築していく。

また、心身の健康についても引き続き留意していく必要がある。次年度も生徒支援委員会を通して情報共有を徹底するとともに、スクールカウンセラーを活用した教員の研修を通して教員の感覚を研ぎ澄まし、問題防止、早期発見、迅速な解決に向けた相談体制の確立をさらに進めていく。

本校は、進学指導重点校として、生徒の高い進路希望を実現させるべく、質の高い教育活動を行ってきた。今後もより高い目標（ゴール）を目指し、全教職員一丸となって学校改革を進め、生徒の進路希望実現と、生徒・保護者・地域の期待に応えられる学校づくりを更に推進する。